

近藤南州の手記「詩餘」

萩原正樹

以下に紹介する資料は、近藤元粹（號南州）による「詩餘」と題する文章である。

本資料は、大雅堂定亮編『増補詩學金粉』（書名は封面に據る。青木嵩山堂、明治30年11月12日刊）に「詩餘 近藤南州手記」として掲載されているもので、本文部分約五葉と詞譜部分三十二葉からなっており、筆者前稿（「小泉盜泉と詞」注②⑨）に記したように、明治期に中國文學史以外の書で、詞について論じるまとまった文章としては最も早いものである。

大雅堂定亮（1839-1910）は京都の畫僧で、號は金玉山房、京都雙林寺住職の大雅堂清亮の子。著書には他に『標註十八史略校本』（林吉兵衛他、1892）がある。『増補詩學金粉』は、もと『（絕律典例）詩學金粉』として明治17年12月に刊行された書物の増補版であるが、兩書を比較してみると、増補されているのは「詩餘 近藤南州手記」の部分だけであり、他の部分はまったく同一の内容である。兩書ともに、首卷に詩論や對句法、絕句・律詩等の平仄圖式を置き、その後「春之部」「夏之部」「秋之部」「冬之部」「雜之部」の五部に分けて、平仄や韻ごとの熟語、對句や作例などを配する構成で、「凡例」に「此編專ばら初心の人を導くを以て要とすと雖ども、凡そ詩を學ぶ人熟讀玩味するも妨なしとす」（原文は漢字片假名交じりの文であるが、以下の引用においては、すべて片假名を平假名にし、また句讀點を追加・變更するなど、読みやすさを考慮して適宜表記を改めた）と記されているように、初心者や中級者向けの作詩の参考書として編まれたものであった。

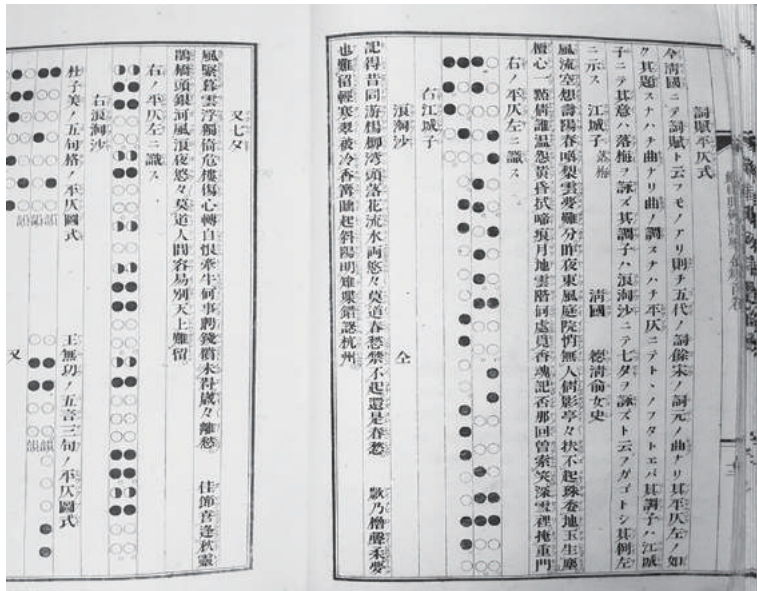
ただ注目すべきなのは、明治17年刊の『（絕律典例）詩學金粉』において既に詞についての言及が見えることである。首卷の「七言律平仄圖式」に續いて、以下のような文と、作例、平仄式が掲げられている。

詞賦平仄式

今清國にて詞賦と云ふものあり、則ち五代の詞餘^{ママ}、宋の詞、

元の曲なり。其平仄左の如く、其題すなはち曲なり。曲の調すなはち平仄にてととのふ。たとえば其調子は江城子にて其意は落梅を詠ず、其調子は浪淘沙にて七夕を詠ずと云ふがごとし。其例左に示す。

この文に續いて、清・俞繡孫の「江城子」一首と「浪淘沙」二首が引かれ、それぞれ平仄式が圖示されている（圖1参照）。



(圖1)『(絶律典例) 詩學金粉』詞賦平仄式

「詞賦」という語は、通常は詩や賦など廣く韻文を指して言う言葉であるが、ここでは「詞」「曲」と同義で用いられているのであろう。また俞繡孫(1849-1882)は、字は絳裳、俞樾の女である¹。

「江城子」と「浪淘沙」の二調三首だけではあるが、一般向けの作詩参考書に詞の作例や平仄式が示されることは極めて珍しい。「凡例」に「此編吾邦にて此まで人の心を用ゐざる所に於て心を用ゐしめんことを欲す。絶律詞賦等の平仄を細論する、これなり」とあるように、

編者である大雅堂亮が、本書にこれまでにはない新味を出そうとして「平仄を細論」し、それが「詞賦」にまで及んだのであろう。もちろんその奥には、田能村竹田編『填詞圖譜』のことや、明・徐師曾『文體明辨』、清・萬樹『詞律』への關心もあったのかもしれない。『(絶律典例) 詩學金粉』から十三年後の『増補詩學金粉』において近藤元粹の文章を追加したのも、こうした新機軸を打ち出そうとする編纂方針と関連していたと思われる。

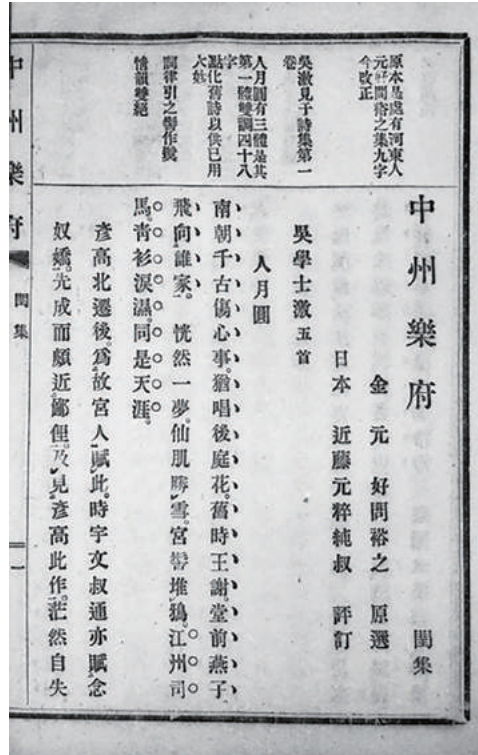
近藤元粹(1850-1922)は、字は純叔、號は南州。螢雪軒、讀未見書樓等の室號がある。伊豫松山の生まれで、明治の初めに江戸に出て芳野金陵に學び、後に大阪で猶興書院を興した。以後、京都・大阪で民間儒者として學を講じ、『増註春秋左氏傳校本』『螢雪軒叢書』『王孟詩集』など、多くの著作を残している。詩文集に『螢雪存稿』一卷附録一卷と『南州先生詩文鈔』三卷がある。その傳記や人となりについては、水田紀久氏の「近藤南州先生と猶興書院」(「てんまてんじん」第51號所收、2007)に詳しい。

近藤元粹の學問や業績について、日本ではほとんど論文に取り上げられないが²、中國では特に『螢雪軒叢書』が高く評價され、また近年では近藤元粹の中國詩學に注目した論文もいくつか發表されている³。

中國の詩人の詩集を多量に校訂し、注や評語を附して出版した近藤元粹は、また詞學についても造詣が深かった。近藤元粹が詞にも詳しくしたことについては、『大阪天滿宮御文庫漢籍分類目錄』(大阪天滿宮、1977)を編纂された長澤規矩也氏が、「集部詞曲類(二)詞選」の部に著録される『(新刻題評名賢詞話)草堂詩餘(近藤南州手校本)』の後に「南州校字ノ外長調小會^マナド體別ヲ書キ込ミナドシ、カナリ詞ニモ通ゼシカ」と記され、またその後「觀書めぐり(二)」(『長澤規矩也著作集』第六卷所收、汲古書院、1984)にも、「南州が博學多識であつたことは知つていたが、明版の詞曲も多少あるには驚いた。しかも、詞集の中には、南州の書き入れがあちらこちらに見える」と記しておられる⁵。『大阪天滿宮御文庫漢籍分類目錄』の卷頭には、元粹の細かな書き入れが見える上記『(新刻題評名賢詞話)草堂詩餘』の書影が掲げられており、その他『目錄』『集部詞曲類』の記載に據れば、清・萬斯同『新樂府詞』(清同治8年序刊)と『花間集』(清刊本)にも手校や手

批手識が見えるとのことである。『草堂詩餘』については、水田紀久氏「近藤南州先生と猶興書院」も、「中には『草堂詩餘』のような填詞集にもびっしり書込みがなされていて、先生が決して四書五經一邊倒の庸儒でなかったことを、如實に物語る」と指摘されている。

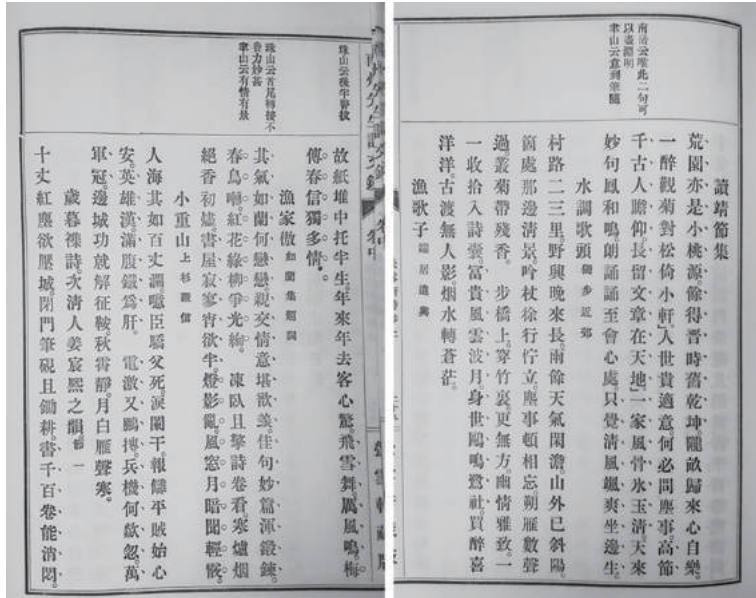
近藤元粹の詞學の一端は、明治41年6月刊の『中州集』（青木嵩山堂）所收『中州樂府』（圖2参照）に附された夥しい頭注からも窺うことができる。たとえば、蔡松年の「水調歌頭（雲間貴公子）」詞の後段に「文體明辨、後段第四句四字、第五句七字、今從詞律」とあり、また同「月華清（樓倚明河）」詞の詞牌に「月華清有二體、是其二體、雙調九十九字、詞律爲一百字」、前段第四句「常記別時月冷」に「詞律、記下有得字、常記得三字爲豆、故爲一百字、未知是否」とあるなど、『文體明辨』や『詞律』を利用して詞牌や詞體の校訂を行っていたことが分かる。また劉仲



（圖2）『中州樂府』

尹「攤破浣溪沙（蠶欲眠時日已曛）」詞には、「攤破浣溪沙、據詞律爲四十八字、末二句上七下三、前後段皆同。此篇末二句上四下五、故爲四十六字、蓋又一體也。諸書無例、姑俟考」という長い頭注が附され、『詞律』（卷三）に見える「攤破浣溪沙」が四十八字體で「七七七三 七七七三」という句式であるのに對して、劉仲尹詞は「七七四五 七七四五」という句式の四十六字であることについて疑義を呈している⁶のは、やはり『詞律』に對する

深い理解があったからであろう。『大阪天満宮御文庫漢籍分類目録』には、元粹舊藏の康熙二十六年序刊『詞律』（掃葉山房後修本）と杜文瀾『校刊詞律』の兩書が録されている。



(圖3)『南州先生詩文鈔』

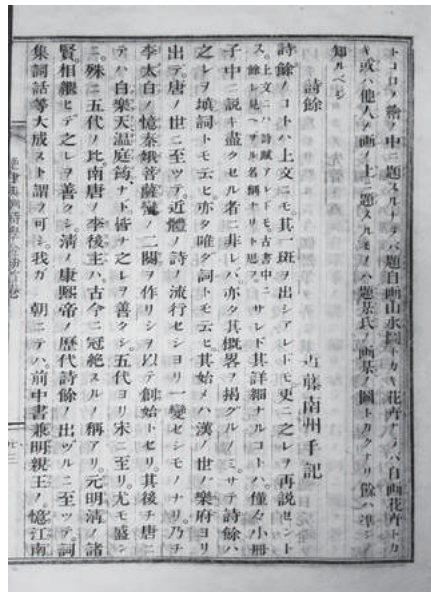
『中州樂府』には、元粹が手がけた他の詩集と同様に、本文に返り点や圈点が付されており、各詞の讀解に有益である。また頭注には「一結高妙」「彩筆秀逸」「妖艷多情」など簡潔な評語も加えられていて、近藤元粹が詞の情趣をよく領會していたことも知られる。『南州先生詩文鈔』には、元粹の詞作二十二首も收録されており（圖3参照）、實作者としても詞を理解するところがあったのであろう⁷。

以下に引く「詩餘」も、近藤元粹の詞に關する知識を知るに十分な内容である。上述のように『文體明辨』や『詞律』をよく讀みこんでいたことがこの文章からも分かるし、また「されど其編、小令のみに止りて、中調、長調等に及ばざりしは、遺憾の至りなり。余是を以て自から揆らず、其完全なる者を編し、以て初學に益せんと欲す」と述べ

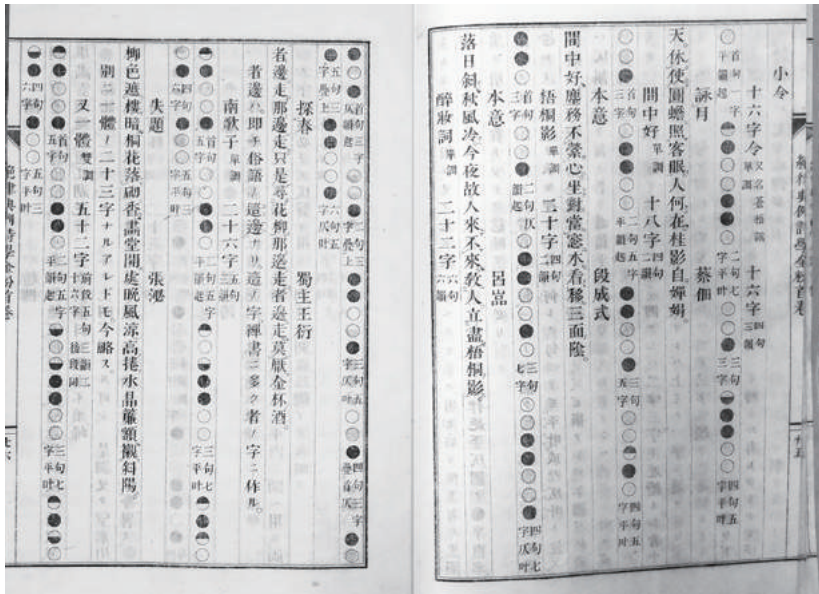
ているのは、竹田『填詞圖譜』の遺を補って詞譜を編纂する意があったように思われて非常に興味深い。もし元粹が詞譜編纂を企圖していたとすれば、『詞律大成』を完成させた森川竹礫と並んで、明治期に二人も詞譜編者がいたことになり、日本の詞學史において特筆すべきこととなるであろう。

近藤元粹の詞學の全貌を明らかにするには、『中州樂府』など公刊されている業績⁸の検討とともに、天滿宮御文庫所藏の書き入れ本や自筆稿本類⁹などの詳細な調査が不可欠であり、今後の研究が待たれる。

先述のように、「詩餘」は本文部分（圖4参照）と詞譜部分（小令三十一調三十六體、中調十七調十七體、長調五調五體所收）（圖5参照）とに分かれており、以下には本文部分全文（本文部分の末には詞譜の圖例も含む）と詞譜部分の詞牌名、字數、作例の作者名と近藤元粹の注を挙げ、詞譜の白圈黒圈とその注、及び作例の本文は省略した。また文中の雙行注は（ ）内に収めた。



（圖4）「詩餘」本文部分



(圖 5)「詞餘」詞譜部分

詩餘

近藤南州手記

詩餘のことは上文にも其一斑を出しあれども、更に之れを再説せんとす。(上文には詩賦あれども、古書中に／餘れ見へざる名稱なりと思ふ。)されど其詳細なることは、僅々小冊子中に説き盡くせる者に非れば、亦た其概畧を掲ぐるのみ。さて詩餘は之れを填詞とも云ひ、亦た唯だ詞とも云ひ、其始めは漢の世の樂府より出で、唐の世に至つて、近體の詩の流行せしより一變せしものなり。乃ち李太白の憶秦娥、菩薩蠻の二闕を作りしを以て創始とせり。其後ち唐にては白樂天、溫庭筠など、皆な之れを善くし、五代より宋に至り尤も盛んに、殊に五代の比、南唐の李後主は、古今に冠絶するの稱あり。元明清の諸賢、相繼ひで之れを善くし、清の康熙帝の歷代詩餘の出づるに至つて、詞集、詞話等大成すと謂ふ可し。

我が朝にては、前中書兼明親王の憶江南の體に倣ひ、憶龜山の詞を作られしを權輿とし、其他は至つて寥々たりしに、近世に至り、菅茶山、賴杏坪、賴山陽、梁川星巖の諸老、皆な之れを作し、杏坪翁は其作尤も多く、且つ尤も巧みなり。田能村竹田翁、丹青の餘暇を以て、特に之れを好み、萬紅友の詞律を以て根據と爲し、旁ら諸書を參考し、填詞圖譜二卷を著はし、之れを江湖に板行せり。爾後初學の徒の詩餘を學ばんとする者、皆な之れに據らざるを得ざることとなれり。故に竹田翁自から云ふ所の、雪月風花の忠臣とは、今日より之れを觀れば、實に誣言に非るなり。されど其編、小令のみに止りて、中調、長調等に及ばざりしは、遺憾の至りなり。余是を以て自から揆らず、其完全なる者を編し、以て初學に益せんと欲すれども、多事役々、未だ其志を果さず、亦た自から以て憾と爲せり。然るに今偶然筆を弄し、其一二を記し、以て他日完全の書を出だすの先聲と爲す。

さて小令、中調、長調の目は、萬氏詞律には、草堂詩餘に始まり、後人これに因ると云へり。(余の藏する草堂詩餘には、其目無し。) 錢塘の毛氏曰く、五十八字以内を小令と爲し、五十九字より九十字に至るまでを中調と爲し、九十一字以外を長調と爲す、古人の定例なりと。詞律には、毛説を以て臆見と爲し、之れを辯駁すれども、余は文體明辨附錄等の説に據り、姑らく右の例に従ふ者なり。詩にも絶句、律詩、古詩の三體あれば、詩餘にも小令、中調、長調の三例ありて、相並び行はるるも、妨げざることなり。

舊譜には、一調中、字の多少等により、第一體、第二體、第三體等の次序を設けたり。詞律には、最も義理無き者と爲し、之れを譏れり。是れは確論にして、竹田もこれに従へり。されど同じ一調にして、數體なるあり。乃ち同じ訴衷情の調に、七體あり。同じ江城子の調に、五體あり。甚だしきは酒仙子の一調に、二十體あるに至れり。右の如きは、第一第二の次序は設けざるも、詞律及び歷代詩餘等の例に従ひ、字の多寡により、寡を先にし、多を後にし、總て又一體、

又一體と列書し、之れを別かつを正論とす可し。

又た單調と雙調と云ふ別あり。單調はたとへば近體の詩の絶句一首の如し。雙調は前段後段と分かれ、乃ち詩の絶句を二首雙べ作れる如き模様あり。されど詩にては絶句を二首併はす時は、之れを律と云へども、詩餘にては、前段後段、字句の多寡同じきもあり、異なるもあり、亦た對句をも作さざるもの故へ、之れを律と曰はず。韻も一韻なるあり、換韻せるあり、其例全く近體の詩と別なり。書例も、前後段の經界の處は、必らず一字を缺く例なり。

又た三疊四疊と云ふ體あり。三疊は、雙調の上へに、更に一調を加へ、前段、中段、後段と、三重に疊ぬるものを云ふ。四疊は、三疊の上へに、復た一調を加へ、四重に疊ぬるものを云ふ。三疊は諸書に散見すれども、四疊は詞律にも僅かに一関を載せ、歷代詩餘にも、數関を載するのみ。後學の容易に作り得る所にあらず、たとひ作り得るも、別に妙味無き者に似たり。

左に出す所の例は、毎調先づ圖を掲げ、次ぎに譜を掲ぐ。總て文體明辨、留青全書、三才圖會、及び填詞圖譜等の例に據る。

圖例。其字平なるべき者は、白圈○を用ひ、仄なるべき者は、黒圈●を用ゆ。又た元來平なるべきも、仄を用ひ妨げ無き者は、白圈にして其下半を黒にする者◐を用ゆ。又た元來仄なるべきも、平を用ひ妨げ無き者は、黒圈にして其下半を白にする者◑を用ゆ。其例、近體律絶平仄圖の◐半白半黒を用ひし者と、少しく意味を異にせり。

韻脚の初て韻を押する者、首句、二句、三句の別無く、總て平韻起、或は仄韻起と注す。上韻を承け押する者は、何れの句にても、平叶或は仄叶と注す。其韻を換ふる者は、平韻換、或は仄韻換と言ふ。三び換ふれば、平韻三換、或は仄韻三換と言ふ。若し通篇平仄兩韻交錯する者あれば、首平に叶す、或は首仄に叶す、又た二平に叶す、或は二仄に叶すと言ふ。

又た一句の内に讀あり。五言の句、通例なれば、二字三字

と連続する者なれども、或は一字四字に讀むことあり。されば上みの一字に讀を切り、下もの四字目に句を切るなり。七言なれば四字三字の綴りを通例とすれども、時には三字四字に讀むことあり。されば上みの三字に讀を切り、下もの四字に句を切るなり。凡そ是類詩句中にも時には有ることなれども、詩餘には尤も此例多しとす。

小令

十六字令（又名蒼梧謠／單調）十六字（四句／三韻） 蔡偁

間中好（單調）十八字（四句／二韻） 段成式

梧桐影（單調）二十字（四句／二韻） 呂巖

醉妝詞（單調）二十二字（六句／六韻） 蜀主王衍

者邊は、即ち俗語の這邊なり。この字、禪書に多く者の字に作る¹⁰。

南歌子（單調）二十六字（五句／三韻） 張泌

別に一體の二十三字なるあれども、今略す。

又一體（雙調）五十二字（前段五句三韻二／十六字 後段同） 趙抃

兩結語氣、上六下三なれども、亦た上四下五なる可し。

是調又た望秦川と名け、又た風蝶令と名く。又一體に入聲韻を用る者あり、今畧す。

荷葉杯（單調）二十三字（六句／六韻） 溫庭筠

是の調凡そ三たび韻を換ふ。亂斷の二仄、塘涼の二平、内に間へ用ゆ。兩の字の處、必らず仄聲を用ゆる例なり¹¹。別に二體あれども、略す。

一點春（單調）二十四字（四句／二韻） 侯夫人

花非花（單調）二十六字（六句／三韻） 白居易

春曉曲（單調）二十七字（四句／三韻） 朱敦儒

漁歌子（單調）二十七字（五句／四韻） 張志和

是の調一名は漁父。和凝諸人、平仄互に異なるを作れども、宋より以後は、大抵西塞の一體に依る。今の作者宜く之れに従ふべし。

又一體（雙調）五十字（前段六句四韻二／十五字 後段同） 李珣

草芊芊の二句、又た○●●、●○○に作り、韻に叶せざ

るあり。後段同じ。別に又一體なり。

憶江南（單調）二十七字（五句／三韻） 李後主

是の調、又た夢江南、謝秋娘、夢江口、望江南、望江梅、
春去也と名く。皆な一體なり、今畧す。

又一體（雙調）五十四字（前段五句三韻二／十七字 後段同）
歐陽脩

搗練子（單調）二十七字（五句／三韻） 吳子厚

桂殿秋（單調）二十七字（五句／三韻） 向子諲

南鄉子（單調）二十八字（五句／五韻） 歐陽炯

遊南浦の句、或は○●の二字に作り、韻を叶せざる一體
あり。

又一體（單調）三十字（六句／五韻） 李珣

又一體（雙調）五十六字（前段五句四韻二／十八字 後段同）
蘇軾

江南春（單調）三十字（六句／三韻） 寇準

憶王孫（單調）三十一字（五句／五韻） 李甲

是の調、一名は憶君王、一名は怨王孫、又た豆葉黃、畫
蛾眉、闌干萬里心、一半兒の諸名あり。

調笑令（單調）三十二字（八句／八韻） 馮延巳

起二字疊句とす。長夜の二字は、即ち上句の尾の二字を
以て顛倒して之れを疊む例なり¹²。凡そ三用韻。

思帝鄉（單調）三十三字（八句／四韻） 韋莊

如夢令（單調）三十三字（七句／六韻） 晏殊

是の調、本と憶仙姿と名く。後唐の莊宗の作内如夢の二
字有るに因り、遂に以て調に名く。一名は比梅、一名は
宴桃源、一名は如意令。

甘州子（單調）三十三字（七句／五韻） 顧夔

訴衷情（單調）三十三字（十一句／十一韻） 溫庭筠

第二字韻を用て起し、二三の兩句連叶す。帷の字以下、
俱に微韻に叶し、而して枕錦の二字、韻を換へ、其中に
間す¹³。填詞圖譜に載する所は又一體なり。今略す。是
調一名は一絲風、單調又一體あり。雙調にて、別に四體

あり。今皆な略す。

天仙子（單調）三十四字（六句／五韻） 皇甫松
風流子（單調）三十四字（八句／六韻） 孫光憲
歸國謠（雙調）三十四字（前段三句三韻十／七字 後段同） 歐陽脩
定西番（雙調）三十五字（前段四句十五字／後段四句二十字） 溫庭筠
何滿子（單調）三十六字（六句／三韻） 和凝
長相思（雙調）三十六字（前段四句四韻十／八字 後段同） 馮延巳
風光好（雙調）三十六字（前段四句四韻十六字／後段四句四韻二十字） 陶穀
醉太平（雙調）三十八字（前段四句四韻十／九字 後段同） 戴復古

此調一名は醉思凡、一名は凌波曲、一名は四字令。

感恩多（雙調）三十九字（前段四句四韻十八字／後段五句三韻二十一字） 牛嶠
昭君怨（雙調）四十字（前段四句四韻二／十字 後段同） 万俟雅言

此調一名は宴西園、一名は一痕沙。 小令は、猶ほ多々なれども、上文にも言ひし如く、略ぼ其一斑を示すもの故へ、餘は略することと爲す。是れよりは中調の例を少し挙げ示さん。

中調

一剪梅（雙調）五十九字（前段五句三韻二十九字／後段六句三韻三十字） 李清照
月滿樓、或は月滿西樓に作る、非なり¹⁴。
臨江仙（雙調）六十字（前段五句三韻三／十字 後段同） 陳去非
蝶戀花（雙調）六十字（前段五句四韻三／十字 後段同） 張泌

此調一名は黄金縷、一名は鳳棲梧、又た鵲踏枝、一籀金、魚水同歡、捲珠簾、明月生南浦の諸名あり。三才圖會第二第三の二句を併せて九字一句と爲す。諸作例を検するに亦た妨げざるに似たり。今姑く詞律に據り、分つて二句と爲す。然れども意味必らず一貫を要す。

玉堂春（雙調）六十一字（前段七句四韻三十四字／後段五句二韻二十七字）晏殊

漁家傲（雙調）六十二字（前段五句五韻三／十一字 後段同）王安石

定風波（雙調）六十二字（前段五句五韻三十／後段六句六韻三十二字）閻選

行香子（雙調）六十六字（前段八句五韻三十三／後段八句四韻三十三字）蘇軾

此調後段起句、○○●●を用ひ韻を叶せず。餘は皆同じ。

別に五體あり。今皆な略す。

醉春風（雙調）六十四字（前段七句四韻三／十二字 後段同）朱希真

後段第二句、一に○●○○●に作る。拘はらざるに似たり。

風中柳（雙調）六十四字（前段六句五韻三／十二字 後段同）劉因

此詞後段起句、○○●●に作り、前段首句と全く反す。

詞律には、調に於て當に此の如くすべしと論ぜり。然れども別人の詞を見るに、皆な前後同段にして、此詞と同じき者無し。姑らく録して參考に資す。

青玉案（雙調）六十六字（前段六句四韻三／十三字後段同）黃知命

此調、凡そ八體あり。是其一體なり。

賣花聲（雙調）六十六字（前段六句四韻三／十三字 後段同）黃裳

後段起句、○○●●に作る。前段と相反す。餘は皆同じ。

此調一名は謝池春、一名は風中柳、一名は玉蓮花。

月上海棠（雙調）七十字（前段六句四韻三／十五字 後段同）

陸游

前後同段にして、第二句淚の字、寄の字、必らず去聲なるを要す。後段末句天の字、宜しく仄字なるべし。是れ偶然の失なり¹⁵。

千秋歲（雙調）七十一字（前段八句五韻三十五字／後段八句五韻三十六字）

謝逸

千秋歲引（雙調）八十二字（前段八句四韻三十八字／後段八句六韻四十四字）

王安石

風入秋（雙調）七十四字（前段六句四韻三／十七字 後段同）

趙師俠

越春溪（雙調）七十五字（前段七句三韻三十八字／後段六句四韻三十七字）

歐陽脩

拂霓裳（雙調）八十二字（前段八句六韻四十一字／後段九句五韻四十一字）

晏殊

中調も亦た多分なれども、今姑らく是れにて止め、以下は長調の例を示さんとす。

長調

滿江紅（雙調）九十三字（前段八句四韻四十七字／後段十句五韻四十六字）

蘇軾

滿江紅凡そ六體あれども、各家の詞、多くは此體に従ふ。

雪梅香（雙調）九十四字（前段八句四韻四十六字／後段十句五韻四十八字）

柳永

水調歌頭（雙調）九十五字（前段九句四韻四十八字／後段十句四韻四十七字）

蘇軾

燭影搖紅（雙調）九十六字（前段九句五韻四／十八句 後段同）

張掄

念奴嬌（雙調）一百字（前段九句四韻四十九字／後段十句四韻五十一字）

蘇軾

此調、又た百字令、百字謠、酹江月、大江東去、大江西上曲、壺中天、無俗念、淮甸春、湘月と名く。體も亦た

九體あり。今其一體を掲ぐるのみ。長調も亦た其調甚だ多し。而して長調は詩餘中に在て尤も作し難き者とす。故に今其一斑を挙げ、其例を示す。學者其全豹を見んと欲する、宜しく詞律、歷代詩餘等の諸書に就き之れを検すべし。

注

1 胡文楷編『歷代婦女著作考（増訂本）』（上海古籍出版社、1985）の「慧福樓幸草一卷」項（415頁）に、「繡孫、字絳裳、浙江德清人、俞樾女、知府錢塘許祐身妻。年三十四、以產厄卒」と見える。俞繡孫没後に俞樾が刊行した『慧福樓幸草』（光緒9年刊）では詞が十五首、また清・徐乃昌編『小檀欒室彙刻閨秀詞』（李保陽編、浙江大學出版社2018年影印本）第八集所収の「慧福樓詞一卷」では、詞十七首が収録されている。

2 管見の及ぶ範囲では、寺門日出男「大阪天満宮御文庫所蔵『雕題』（中井履軒撰）諸本について」（『中国研究集刊』第10号所収、1991）、及び同氏「『戰國策雕題』（中井履軒撰）と近藤南州と」（『懷德』第60号所収、1991）の二篇のみである。なお2007年7月29日開催の大阪藝能懇話會において、芳村弘道氏が「近代大阪漢文學の泰斗 近藤南州の編著について」という題目で口頭発表をされ、その発表資料の惠贈を忝くした。本稿作成に際してはその発表資料を多く参照させて頂いており、詳細な資料とともに、近藤元粹について種々御教示下さった芳村弘道先生に厚く御禮申し上げる。

3 王兵「論近藤元粹の中國詩學批評」（『日本研究』2010年3月）、張兆勇「近藤元粹視野中的韋柳詩—兼述近藤の中國詩觀」（『淮北師範大學學報（哲學社會科學版）』2014年2月）、王園瑞「日本近藤元粹及其《蘇東坡詩集》考述」（『樂山師範學院學報』2019年2月）、程雪「近藤元粹杜詩評點研究」（『蜀學』2019年10月）など。

4 「小令」の誤植であろう。『大阪天満宮御文庫漢籍分類目録』の巻頭に掲げられている『（新刻題評名賢詞話）草堂詩餘』の書影にも「第一體／小令」の書き込みが見える。

5 近藤元粹の藏書が天満宮御文庫に入った経緯については、「觀書めぐり（二）」に「南州の藏書中の貴重書は、その死後、中尾松泉堂の前代によつて賣り立てられたと聞く。（中略）本宮に入つたものは、門人たちが募金をし、南

州の遺族から買い取つた、二萬餘巻と稱するものである」と記されている。

6 「七七四五 七七四五」という句式の四十六字體「攤破浣溪沙」は、「琴調相思引」の別名であり、「浣溪沙」の派生體である「攤破浣溪沙」とは異なる詞牌である。唐圭璋編『全金元詞』（中華書局、1979）では劉仲尹詞の詞牌を「琴調相思引」に改めている。

7 神田喜一郎『日本における中國文學Ⅰ・Ⅱ』（『神田喜一郎全集』第六・七卷所收、同朋舎、1985・86）では、どういうわけか、近藤元粹の詞にはまったく觸れられていない。

8 廣く詞曲に関わる業績として、近藤元粹校閲、鹿島修正譯の『評釋西廂記』（青木嵩山堂、明治36年、明治43年再版）がある。『評釋西廂記』について、井上泰山氏「日本における「西廂記」研究（附；譯注書目録、關係論著目録）」（『中國俗文學研究』第8號所收、1990）は「これは金聖嘆の批注をも含めた初の全譯本である點、明治期の譯注書の中では特筆すべき一書である」と評しておられる。なお鹿島修正は、明治35年に青木嵩山堂より『速成日清會話獨修』という中國語會話の參考書を出版している。

9 水田紀久氏「近藤南州先生と猶興書院」に、「本平成十八年（二〇〇六）十一月一日、當地古書肆の老舗松泉堂書店社長中尾堅一郎氏は、たまたま氏の姻戚三重縣伊賀市、町野家の土藏に昭和十九年より疏開中だった先生の自筆稿本類を中心とする舊藏書五箱を、先代熊太郎氏筆の整理目録とともに大阪天滿宮に寄進された。中には草稿等三百點のほか、先生の額入寫眞や先生着用の儒巾一着も含まれていた」と記されており、こうした自筆稿本類の中に詞に関する資料が含まれている可能性がある。

10 王衍の作例首句に「者邊走」とあるのに注したもの。

11 溫庭筠の作例は以下の通り。「一點露珠凝冷。波影。滿池塘。綠莖紅豔兩相亂。腸斷。水風涼。」

12 馮延巳の作例「明月。明月。照得離人愁絕。更深影入空床。不道幃屏夜長。長夜。長夜。夢到庭花陰下。」の首二句と「長夜」句についての注。

13 溫庭筠の作例は以下の通り。「鶯語。花舞。春晝午。雨霏微。金帶枕。宮錦。鳳皇帷。柳弱燕交飛。依依。遼陽音信稀。夢中歸。」

14 李清照の作例前闕末句の「月滿樓」について注したもの。

15 陸游の詞の前段第二句「弔興亡、遺恨淚痕裏」、後段第二句「折幽香、誰與寄千里」、後段末句「楚天危樓獨倚」についての注。

執筆者紹介



萩原 正樹 (Masaki Hagiwara)

立命館大学文学部中国文学・思想専攻教授。主に唐宋詞の研究、具体的には詞牌・詞体と詞譜、詞論等について研究を行っている。主な著書と論文に、『宋代の詞論—張炎『詞源』—』（共著、中国書店、2004）、『森川竹礫『詞律大成』本文と解題』（風間書房、2016）、『『詞譜』及び森川竹礫に関する研究』（中国藝文研究会、2017）、「『欽定詞譜』内府刻本二種の異同について」（『学林』46・47、2008）、「国内所蔵稀見『詩余図譜』三種考」（『風絮』9、2013）等がある。

立命館大学文学部中国文学思想专业教授。主要研究唐宋词，具体为：词牌、词体和词谱、词论等。主要著作有：《宋代的词论—张炎〈词源〉—》（共著，中国书店，2004）；《森川竹礫〈词律大成〉本文与解题》（风间书房，2016）；《〈词谱〉及森川竹礫研究》（中国艺文研究会，2017）。主要论文有：《〈钦定词谱〉内府刻本二种之异同》（《学林》46、47，2008）；《国内所藏稀见〈诗余图谱〉三种考》（《风絮》9，2013）等。

리쓰메이칸대학 (立命館大學) 문학부 중국문학・사상전공 교수. 주로 당송사 (唐宋詞) 연구, 구체적으로는 사패 (詞牌)・사체 (詞體) 와 사보 (詞譜), 사론 (詞論) 등에 대해 연구하고 있다. 주요 저서와 논문 에 『송대의 사론 (詞論)—장염 (張炎) 『사원 (詞源)』—』 (공저, 中国書店, 2004), 『모리카와 지쿠케이 (森川竹礫) 『사율대성 (詞律大成)』 본문과 해제』 (風間書房, 2016), 『『사보 (詞譜)』 와 모리카와 지쿠케이 (森川竹礫) 에 관한 연구』 (中國藝文研究会, 2017), 「『흠정사보 (欽定詞譜)』 내부각본 (内府刻本) 2 종의 이동 (異同) 에 대하여」 (『學林』 46・47, 2008), 「일본 국내 소장 희견 (稀見) 『시여도보 (詩餘圖譜)』 3 종 (種) 고 (考)」 (『風絮』 9, 2013) 등이 있다.